

## 研究者と教育者としての課題

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科教育方法論講座

李 受眞

博士課程に在籍していた3年間は、学会活動と論文投稿に力を入れながら「研究者と教育者としての課題」について考えさせられた。特別支援教育に関する領域では研究者としてのみ活躍されている方は少なく、大学教員でありながら研究者として活躍することが多い。その中で、非常勤として、将来教員になることを目指している大学生を対象として「特別支援教育」に関する科目を教えることになった。これまで一度も人を教えたいと思ったことがなく、このような気持ちで臨んでいいのかと葛藤しながら授業を引き受けることになった。しかし、受講生からの「より良い教員になるためにこの科目を受講する」「様々なニーズのある児童に対応するためにこの科目を受講したい」というコメントなどを読み、新しい知識を得て将来の教育現場においても生かそうとする学生らの姿を見るうちに、「この人たちが現場の先生になってから困らないように特別支援教育に関する知識を教えたい」という気持ちが芽生えてきた。教育者としての立場になってみることで、自分の中で今後の教育者としてのあり方について探求することができた。これからは教育者として試行錯誤しながらも学生を指導していきたい。

ところで、研究者であり教育者であるという立場は実際に大学の一教員として勤めてみると、どちらかに偏りやすい。大学教員としての仕事は授業や大学業務に専念しながらその合間に論文執筆や学会発表などの研究活動もやらなければならない。今現在は授業準備や会議等に追われる毎日で一体いつ頃研究活動ができるかの目処もつかないため、いつまでもこの状況が続くのではないかと不安になったりもする。めまぐるしい毎日を過ごす中で、自分が教育者として、そして研究者としての初心を失われないように教育活動も研究活動もしていきたいと思う。

それに加えて研究者としての課題は、研究のフィールドが教育現場となるため、教育現場で活躍している先生とのコミュニケーションの取り方である。その中で、研究者と教育者としての課題に関するテーマのワークショップを受ける機会があった。このワークショップでは、研究者であるのか教育者であるのか自分の立場について改めて考えさせられる機会が設けられた。参加者には小学校や特別支援学校な

ど様々な教育現場で活躍されている先生方や大学院の学生等がいた。現場にいる教育者の立場では、単なる研究成果を求めるのではなく、現場における子どものニーズと将来を見据えた課題も含めて進んでほしいと望まれていることが分かった。私は知的障害特別支援学校におけるキャリア教育について研究を行いつつも教育現場と研究者の現況と課題についてはあまり意識していなかったため、現況と課題についてうかがうことができたのは大きな収穫だった。そして、教育者としての自分には、将来教員になることを目指している学生にとっての研究者と教育者とのコミュニケーションのギャップを減らすことができるのではないかと考えた。話を聞いている中で研究する立場においても教育する立場においても、それぞれが児童生徒のことを考えて行動しているということに変わりはないことが伝わった。しかし研究者の中では児童生徒をデータとして見てしまう人もいる。そのため、倫理教育の重要性について実感した。特に臨床心理学の分野は人を対象とした研究であるため、人権が何よりも尊重される。常に責任のある研究活動（RCR）教育についての意識があることを自分に問いかけながら、現在行っている研究に関して責任のある研究活動のためにできること、良い研究のための到達点を考え直している。現在行っている研究の対象者は軽度知的障害者であり、インフォームド・コンセプトに偏っていた既存の研究倫理に加え、「Well-being(よく生きる)」を意識した研究活動を行う必要性を感じている。その中でも、特に強調されている Meaningful life（他者への貢献）を肝に銘じ、知的障害者とその支援者や保護者がより豊かな生活を送るために貢献できる研究を行いたいと思っている。